

披沙揀金

十六

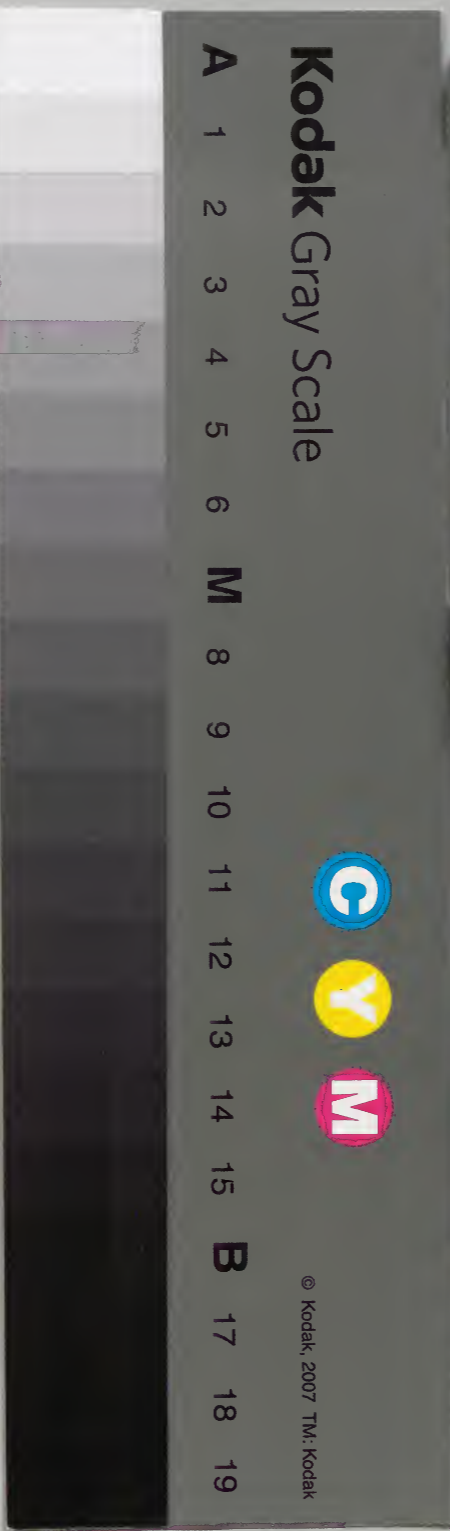
魚



共廿四

内閣文庫	
一五九函	三三二九九號
四架	三四冊

内閣文庫	
番號	和 33169
冊數	34 (18)
函號	159 60

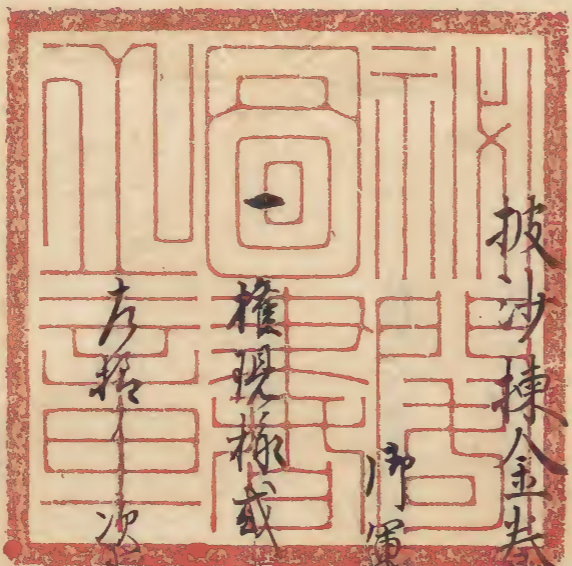


糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

関294

披沙揀金卷第十八

師軍令付書



権現極成と云ふ上意と一昔鑑ニ高鑑か〜云々ぬ〜のり

方格 次第はありとのみ非す始ふか〜ハ〜

らちお〜若かり〜と上意の由

寛元 聞書

一 傍旗竿換〜いふ付〜換〜中〜中上ふ旗竿換迄事

を用〜候行先〜は旗竿より候程の竹ハ何程とあり

旗を付〜様〜は〜は〜の上意なり

寛元 聞書

一 或時師信僧録の曰

家康公は軍陣の堅く事やしも及まざるゆかりなれども
万事の工夫を多し軍陣に掛引少く救つるの指を人の依り
中も疎かりぬゆかり軍陣と云はれぬゆかりは
とあるに細く清存知かされぬなり或は記

家康公室の事若きものも後家と軍陣して馬の操候と
付く事と操も合きつるを付るに悪し馬を養ひしれを
少乾かせし糧の代りし藁と云ふは切り少くやまらば

して夾み付たるゆかり又馬車は成るなりして入るなりと
ら先には藁を和してもさうし道ゆく馬のこゝ速に
成せんゆかりゆかりは世の大將乃心つる事なり
かりといふ謂之は名將はゆ夫若武者共なりゆかり
たし誠し者越き依りゆかりゆかりも傳へ兼て利なき事誠
小名將のゆ恩なり馬を飼てゆかりゆかり夏ハ疎更くさ
る安し荒糠飼いつる馬をまきゆかりゆかりを臟腑をこめて
馬痛しゆかりゆかりゆかりを細く切り和かして

入よりの儀、誠よ深き由夫なり、若武者は未代迄可申奉

か
箱

一 関ヶ原に於て九月十六日朝諸口、一觸りふよ弓矢の肩よ

切らぬ紙と付て味方討るべき格よ、皆く制す、一と作出

こふとあり、是法團の軍勢野合は、大合戦亦込の軍勢を

對の指物相平かとは一勢、其家中は合印あり、入乱

れ、つる討々互く、味方同士、或知ふ事か、其為く、是は

越軍、味方はお平なり、尤も極せ、云

老士
詰録

一 慶長十九年十月、日没後、京都より飛脚、到東大坂籠

城、此用意、少く、騒動の由達上聞なり、然ふよ

権現様よ、ハハ、隠居、お儀、おれ、朝日の清、禮乃、荒、連、お、か、く、い

は、表、出、市、多、格、何、も、ハ、違、成、成、い、く、由、能、清、見、物、下、格、と、格、信

ひ、又、よ、上、方、より、早、飛、御、玉、東、本、多、上、野、外、文、箱、持、く、出、し、是

大、坂、此、格、子、中、吹、多、格、ハ、故、由、能、止、なり、東、十一、日、大、坂、一、市、出、馬

多、格、ハ、由、多、作、出、なり、本、多、上、野、外、ハ、由、能、止、なり、自、分、此

格、子、よ、也、状、を、書、せ、く、由、能、止、和、衆、と、井、伊、掃、於、此、本

多兵濃守松平下総守けんハ京村赤寺ヲ集リテ陳セ
頼朝ノ入中ノ城ニハ晝夜トモ急キテ上リテ京村
の内ニ入城セシ居テ申由ナリ江戶

台徳院柳ノ早飛柳ノ名ニ依テ少將ハ此邊ニ集ル要員

此ハ仕立丹口キリノ名依テ十月廿二日小江戶出立テ抱

由ナリ 諸士
軍徒

一 大坂騒動の旨板倉伴安守より江進江早馬十月廿後
府ノ至其日

大津不極ハ親世た近ノ津能ハ信丹其ノ上常陸以頼宣水戸

鶴子代尤も七能方成リ格ノ名依テ入京於テ子馬東

丁大坂板屋の中江進ト上ノ名依テ能歩ト上本多上能ハ純

板倉月膳ハ重昌我百東ノ十一日信出馬ト成リ同法團ノ

相觸テ申由信出市押陣の次第ハ大和組ハ信大和ノ死

在而不知トシ信ハ依勢近江兵濃尾張三州遠州此軍兵

共ニ一割トシテ出陣仕江州城多ノ隈ノ野陣トシ決中下

知成テ信ハ北國諸ハ大津板本堅田ト信出陣ト西武勢ハ

為官多座と限中國ハ池田我泊四國勢ハ泉州向寄り
悉陳て致かり居相田城小出大和守ハハ内和勢と一合
出雲守より一可み越中出馬来り十一日ハ相控ゆる右ハ
の不達令を陳て存立名救通徳國より一付居り使者
お後子飛脚来て中坐又追付同文言に使者と
渡支通ハ觸れ可中者文作渡打長旗ハ陸軍行
は左田と美入乃保板令を置り又後付市陸奉行ハ大久
保平助若林和泉文仰付中陣用之あり
大坂四陣
覚書

一 中陣觸り付東海東山南海北陸ハ陽ハ陰而海軍兵片
國々より并立海上ハ陸地より引もさハ大坂近邊充滿
ハ左右在待中候十月十一日

大坂而振致ハハ之を以尾張宰相義直よりハ内服ハ為近光
日より尾張ハ内國あるハ名護屋より一ハ追武具より旗
指物推張るハ仕の管かり意ハ宰相教宣付駿河よりハ
仕成り舟上下陣羽織正してささりハ其後ハ駿河
田中ハ内宿陣十七日ハ尾州からハ内悉陳大而左一日ハ追

尚十九日天農國改阜一は天降の如く美濃國高松城に
徳永左馬助方より秀頼に臣文系に由りて之を上に扱え
成て濃を以て一揆起事して有る其心以て致る事作也
同月廿二日

大津取極二條一は天降先以皇城堅固計候由安堵方候
廣橋大納言綱光三條大納言實條勅使に候天降の如く
獻感有極由清光の御門近國の諸寺に毎口群集候
此後候事の上り集
大板津
陣光云

一 慶長十九年十一月十九日已下刻

大津所様茶臼山へは為成けしはえ東荒陵の由天主寺より六所
斗坤より中ふ世俗は茶臼山へ唱へり以て勝山より改先を
い由け時

將軍極小も為成尾張及後尾張を始め由譜代大名元
者所供の由交よまへり此後定事作也
大津所極の由左へは尾張宰相及由右へ駿河中將及横田
長右衛門よりなる加へり此軍事より永井右邊

將軍極中友、其言本主水組と、右、阿部信中組共、以後、
 は水野集、青山伯耆、中多、三、孫、在、加、中、軍、奉、行、出、後、對、馬、
 守、之、所、右、此、書、付、之、自、筆、之、也、
 將軍極中友、其言本主水組と、右、阿部信中組共、以後、
 は水野集、青山伯耆、中多、三、孫、在、加、中、軍、奉、行、出、後、對、馬、
 守、之、所、右、此、書、付、之、自、筆、之、也、
 將軍極中友、其言本主水組と、右、阿部信中組共、以後、
 は水野集、青山伯耆、中多、三、孫、在、加、中、軍、奉、行、出、後、對、馬、
 守、之、所、右、此、書、付、之、自、筆、之、也、

集
 落
 棧

一 十月廿二日安藤常力成瀬集人永井右近と、右、信、月、法、口、等、
 佐、秀、之、軍、中、陣、一、行、其、多、佐、付、松、平、下、總、守、中、多、美、濃、守、
 作、久、右、内、守、河、川、豊、前、中、多、美、濃、守、城、官、内、中、多、美、濃、守、
 佐、付、付、大、坂、四、門、の、警、固、難、入、之、所、制、止、之、成、以、口、薩、
 摩、之、兵、船、七、百、艘、豊、前、肥、後、筑、後、等、外、九、列、兵、船、三、艘、
 室、兵、庫、之、兵、船、の、一、本、多、上、野、外、披、兵、船、意、未、ハ、陽、陳、在、
 右、佐、付、出、
 大、坂、所、
 陣、是、也、
 一 十一月廿二日松平武藏守献因人二人是自城

中塩河清左衛門使者來而投細書于武藏守郎
從香西源助互諫武州内通於秀頼之趣也武州聞
而捕上之又篠原者使者五人遣于淡路可令百
姓等蜂起之由同囚來又先是和句半左衛門自
大坂為使通于此事政宗政宗擱進之件八人皆
截十指火印鉄輪中有秀頼二字當額可令追放
城中給之由今日被仰付

大坂冬陣記

一十一月廿八日

大御所可有出御之由昨夜依被仰諸方寄手各
帶甲冑急致支度之由後藤庄三郎申上慶仰曰
不相觸以前左様之企甚以不可然藤堂年已老
如何令諸卒著具足驚諸陣哉可謂曲事仍召本
多上野从等此由可觸遣諸大名陣所之由被仰
出慶上野从申安藤對馬守自平野參云々即召
御前右之趣直被仰渡可申
將軍之旨云々又諸勢之兵糧悉令加扶持給三

十万人毎日千五百石云々或米或銀遠國之衆
如奥州者賜一倍扶持爰許茶磨山其外附城數
箇所被仰付来年二三月追緩々可攻一旦急寄
而自然殺人數者不可然又仰曰小出大和守陣
所可為森河内十七箇瀬之旨觸遣處柙原勢在前
故難替陣之由申之其上條々子細與敵密通歟
可追立彼陣所之旨被仰出大和守第信濃守者
上野从加異見致譴責之由申上

大坂冬
陣記

一十月廿八日福一由新家の由巡見坂止本多上飛外案漸
隼人正安及弟力と云々切せと同日京都より為勅使
廣橋大納言三條大納言等下向あり先体永陣に固窮痛心
召し召る軍勢共しく不知仕先海河う仕との勅宣なり此其
考より共永陣より系外より由

大坂取分より召分りし徳軍増兵糧と下りて仕分る作
出は毎口二十万計軍勢千二百計配分せし遠國乃

輩より一倍を倍揚人

大坂陣
陣記

一 十月廿八日永井右近水野日向守と石橋多清より新田の道筋を定むる橋丹波守も上意に依りて其の如く日向守より付糸の城方より持方へ割を前より尚仙波を前へ一塔より高井樓と上の由中上の一は

大河内柳守名より其の如く其の物子清は前川際へ住居を付大筒より井樓と井前より高木多上野分は作付良付より住居より中其辰永井右近水野日向守とて住勝成は住居場より日向守より其の如く着中より割と越は住居

場より押破りては名より日向守中より右近日向守のたぬひより持方へ割と渡款の構をとる取との金成と邦推より日向守同前より言下り住居より右近兼川石住候より付日向守同前より住居より其の如く住居より石川

大坂市
陣覺出

十二月廿日晩系

前將軍真田丸は色雨巡見有るれを城を伊本七郎兵衛遠雄赤尾旗本立至矢狭毎に鉄炮を住居款責ハ花やうに

一戰之支度……防衛をすべし年尔も不可貴

旨を仰出 今本本大坂軍記

一極月朔日長中井大和守と任吉と石と東の四口へ茶磨心

へ御本陣を可移然ハ仁波此町屋と壞し茶磨心へ御陣小屋

故に掛の旨を仰 大坂内陣 覺書

一十二月四日未刻

大御所渡御茶磨山本多上野以前□為御覽
普請作事也又城近邊前手摸搦為御覽自茶磨

山見廻藤堂和泉守陣邊給及晚還御云々敵城

放銃炮如雨雖然數度自出御給諸人弥感申之

又吉野與北山熊野山夫等為可抑留年貢少々

致山籠之由立御耳依之仰其邊代官可取人質

旨被仰出 大坂冬陣記

一極月朔日晚及中坊大進と石大坂籠城此等妻子充規

等大和の内へ隠居……沙汰あり搜へ出へ搦可進

旨を仰出 大坂内陣 覺書

覺書

一十二月五日横田甚右衛門間宮權左衛門為物
見赴仙波天滿歸申曰御錠之趣鉄炮者雖一人
可甚惜事也能々土手堤等置前而責寄無手負
支度肝要之旨申渡處鉄炮者申様各為堀溝之
埋草而諸卒可登城覺悟處忝御錠哉之由諸人
悦勇云々其上諸將皆謹待御意云々

大坂冬
陣記

一十月六日九鬼長門守守陸之宮城中
有下番取志之川只取志之宮守御所横田甚右衛門

同宮權左衛門云々諸將皆謹待御意云々
一諸軍矣鉄炮之中事哉厭思百多御出其旨後

大坂冬
陣記

一十二月五日池田宮内少輔峰湏賀阿波守出御
前仰曰築土手立竹束無手負様相構而可責寄

大坂冬
陣記

一十二月五日召高野文珠院南都内山山伏先達
仰曰吉野大峯五鬼之中一善鬼名助入大坂依

ある天満の攻めは巡見は為出所城中より石火矢を放り
と下り物に殺しし後より同日中井大和へ命して
熊子に攻具を用ふ事しむ今日代を極くしむる古儀を
以て埋居る者淺野但馬守長蔵松平去住守忠茂へ命

せし向
三河記
大全

一 極月十三日惣攻用意結橋熊子埋居以下大和へ所傳付浅
野但馬守松平去住守忠へ古儀を傳付極に横橋等埋て

中下知なり
大板沖
陣芝虫
是上

一 極月十六日為勅使廣橋大納言綱光三條大納言實條下向
天の初老へ永く在陣宗元思石軍中へ依り決大將へ
付子へ御傳へ然る勅定なり其初迄禁中

家康秀頼和乎此清扱てる者清内之け趣日向入及傳長光
披露

大市取付許容なり一六日攻野道兵衛相富官内大和和り
所傳付備前守長沼藏於正定秀孝口より大筒百挺城中へ
弁子城中に騒動影り今日より城中惣陣より二三度

はく関とあけ鉄炮つるにけしり中侍下知なり又玉造
口より大筒をふ千帖敷と目高水うせり下も其玉淀屋法
彦西一落城中陣外登りし
大坂市
陣是書

一 大坂表陣はくき

高市取評儀有る先大坂の内意を以てけしにも大坂を
引退天和郡山一國者儀にありは諸將と云い取寄は作
事よりても秀頼義門をけし上八侍散向ありて別攻口
水子分有る
天元
記

一 宵夜

大市所極出陣急成りし付て湯先備れ本多休渡守紀平
多大隅守立花左近前田大和守日根野藏助正菅谷左衛門佐
秋之越中坂邊由羽守那須元由利元武川元津川元清旗本
の湯先赤小く本陣に陣を

大市取極二條より十所斗出れあより大坂籠城仕仕者城中
より思ひ出れ忠告一名儀者より中板倉伊賀守方(東伊
賀守けり)言上仕りより別今日れ湯立市延川原右

若者若年のこと

秀忠より上り申す中上少不落着けりしりり中家と令之
為京朝くつ整令度大坂く籠城はして何れも関東内
忠告中上内系は安板倉伊勢守方へ申通り大坂城中
へ別據申しに五穀の並ひとらつて籠らせし紙が
しりり申して居り候ふより大坂まで俄よもたてり
大坂内極は出張の政小く内裏にありあり火の
焼たうり申す又去年はてりあ方より出張を成り

大坂内極の中陣大坂内切あり一方に有るは揚真哉
變りて申すお板倉の事と申す上存して系上仕由申す
し中三日の逗留を成右れ大付も悉く存し一五捕ぬ
又申すたつとかり

大坂内極大相路と云ふ出いて上総外越後元信濃元奥州

元大將にきき通申す押さぬ
慶長見
聞書

一 長井内陣より二條の内城より

大坂内極

名徳院極尾張極又未彦く本多作渡守を在立中軍伴
定の付く殿極中進みたる出

大寺所極(市先)は市所認事師上りて記

名徳院極中令釈と多拉ひて

大寺所極は市所認事師上りて記

大寺所極も

名徳院様の市所認事師上りて記

上極中極極克ハ多為見しとくも危角は市所認事師上りて記

守何角と中換投多中一に付達く市所認事師上りて記

大寺所極は市所認事師上りて記

市所認事師上りて記

又又又及令戦り付多市所認事師上りて記

候と市所認事師上りて記

名徳院極中令釈と多拉ひて

候と記く市所認事師上りて記

市所認事師上りて記
紀州家大坂
陣覺書

一 夏陣のとき、京都に大坂表に兵糧は小坂の陣に
 用ゝるに三日分は腰を糧を以てに之に三月意有
 果して一日は肉に落城なり
 前橋寫
 藏用書

一 六月六日夜本多正野外に出るは陣に方近中基の
 者遣り弔義し伺ひハ明敷ハ茶磨心本陣より下成り
 惣軍ハ各陣の陣取を以て示し給ふに依り茶磨心
 表へは款出張仕り前へは出意いふに存し下り先法陣へ
 觸り果て翌七日ハ茶磨心本陣より成法軍に感

中山 大坂市
 陣差虫

一 六月七日ハ初七日

大坂の陣に出馬任者ハ押して成中より出出時日ハ掃放和
 泉日向共外大和元ハ陣の外骨打中より今日ハ

大坂の陣に先越前元

將軍様先加意元任付の間時日ハ旗本ハ旗本ハ旗本
 旗本任付の任付して任者ハ押しては旗本ハ旗本ハ旗本
 小坂の旗本ハ旗本ハ旗本ハ旗本ハ旗本ハ旗本ハ旗本ハ旗本

先づ昨日先づ骨打中以後に先任渡の七日頃時分
摩心より又里わき前まで

將軍様は出立成内駕は傍まで四月二日成内本多仕渡り
示がわき近く系

將軍様へ中上は

大浦前極楽磨心へ中押成内へりる

將軍様へ心へ中押成内へりる

將軍様へ京磨心へ中押成内へりる

大浦前極楽磨心へ今日れり成内は何れも去年の陣場へ
中押成内へりる中押成内へりる中押成内へりる
中押成内へりる中押成内へりる中押成内へりる
中押成内へりる中押成内へりる中押成内へりる

將軍様へ中上は先づ中押成内へりる中押成内へりる
の極子へりる中押成内へりる中押成内へりる
其の去年れ陣場せん場へりる中押成内へりる
中押成内へりる中押成内へりる中押成内へりる
中押成内へりる中押成内へりる中押成内へりる

二月七日

大市不極より為り意中使者元々来只今平野ゆく少押
極ひ之程天皇寺表へ由儀有る尾法書に二君へ軍討敵
同て多極の同志りく合戦初中極くくは

將軍極より下知言るくは其分お守れ條々作付ひ

事
山本
日記

一 権現極上言く合戦ハ何の度くても是く是くはにてハ
かき只合戦をきくは事なりたき秀頼へ組合上りな
りたる方々の勝たかり是より外くは軍法のみ作付

ソノ事か
諸士
軍談

一 款味方身く相支て守合をきくは事多し保米倉丹後と此石
りく惣軍へ下知不ハ合戦を子仕ゆくは尾張宰相殿
駿河守殿と四取同て多成り必合戦と始り事し事有来ハ
馬とは一町をわく跡へ是自身下立鎧を持寄て徐くは
かりは

大市所請ににくは事多し保米倉丹後と此石
戦中上りも多し中は日向守也意志くは此度は今日

向く四押多成以乃筋大軍小て押傍押前とる不承以所
將軍より内使ある其以成作上は城申より大軍出中
る早旗を多倍り指しとの事なり

大津所より外中家久度棟中拂り出しも款七百なり
はる所一夫と大軍と指成之調法共なり

將軍に使ある其以成作上は城申より大軍出中
保坂庄田四押多成以乃筋大軍小て押傍押前とる不承以所
四旗を任者へ押せて中申下知にりしも城より使と

出天王寺はよみしとて款天くは是輕合戦始りし指し見え
中は任者へ四旗を押しては款と歸へるなりし四旗おく
れ中はの同直く天王寺へ向幕白の四旗と押しりし上り
然下り安後判馬る中はは

將軍梅湯意しは款は日多は侍りしとて中は切共し見切せ
早合戦とて成度名作上其しとて追付共し四押甘有
右四返事しとて四箇よりし出草鞋とて馬馬しとて
四旗とて天王寺へ押す旨なりし平姓へし押多成尾張宰相

後後河宰相殿へハ早の信後移く事迄にハ跡へ正作大板川
陣先出

一 大板清陣の村柳示意はる康勝并井伊掃部大板の先鋒本村長門守と合

戦し美年より敵と秋家より出づ藤田能登守は以四目

付と成し孟光より以友田ハ謙信の小姓よりハ括別の勇

士ゆへ甚也意よりハこのかへ唐勝車式並少補の家督は

終つれハ何卒此度大功と云々を度と云ふ事らまは故かり

有六日差江表よりハ井伊掃部大板の先鋒本村長門守と合

戦のとき藤田能登守柳示の借よりまきくわ知せハ大板舞

浪の藻印ハ馬京ハ本村長門守と見えたりハ偽の色く

み殊の外強くさゆる今佐和山の事ハ括母てハ事となく

押さるるハ合戦ハ一敗二傷ふまハ爰にハ待更進来る

敵の乱まはるハ討屋ハ味方ハと出居くハハハハ柳原の

家老保赤志多場海松色の母衣く十文字ハ徳と横くハ赤

巴ハてハと掛ふる事ハすと割すハ井伊兵部ハ勢と三股

小立備ハ本村ハ四の余の儀ハ中ハ赤一文ハより突てハ八回

合十席戸塚佐太史一番二番に徳を合すハも佐助掛り

威く之忍く欲て逃崩す大坂方散るま亦ふれ甚く
始山口右馬助内友新十郎真野義人討死に扱も榊原康勝の
扱人数の見物して居るはふして潮馬早き者七騎亦
付りて塞きつて掃部頭に首級百餘り歎きつても
康勝は僅く七ツもかり諸士皆忠義の體にたる故各々に
合つて朝不忠兵衛に惜と幸と心ひて翌日七日は
天王寺口に忠義兵衛只一騎もく亦逃出さずは戦つ討
死す榊原義元後京二條の湯城におるけ度ノ戦功は

吟味ある保東忠兵衛のふ内記と藤田能登守のふ事
といつて對決す一内記一ふ上は故友田の不覺に扱るは
上意より園東方は二勝といふは別款をかり又上
方けり夫と誣もあらず夫事かり國々まで可矢の愛り何
れ事なれどせう藤田の誠度かかるともく傳長老とい
て兵より六國の風俗を伝へ合戦の事始り不と傳續
せり其後より傳部當家とて言

武事
紀法

海軍装束中巻

三五

長久保に於ては先づ敗軍に當りしは其具足は其の
具足は湯釜黒練の冑は推形ありたぬぬりたり上意の趣
の掛けは急急いしとりの急急いし急急いしとりの急急いし

その作り
武色
雅談

前巻には所持銃はしつて長刀一枝と十字巻の一本あり
天正十七年大和納言度より明令に具足二百枚中巻
あり野方力百振あり是れ其甲列武田のありし中巻

子抱は若れ具足は成て夫大勝者のとくせむ人 武辺 雅談

一 家康より初三河國大樹寺に旗を借らせし軍より其勝

終り天下を治給へし家康に旗を借らせしは件の旗

の事

厭離穢土 欣求浄土

是一心院の巻巻上人の筆なり云 久世本 翁物語

一 権現様御旗永祿六年陽月七日に白旗一幅一丈八尺二寸

あり其旗九ツ付御旗より永祿六年四月より牧野忠康より

照う一筆は扇と云ふ上馬市に成る事舊くも指月同

り之の由は作お後ハ熊毛に居ると云ふたふた扇れ

□一間此付南より白は事云幅四馬市なり 厭離穢土

欣求浄土の八字と書は天文四年三月十一日井田金成乃

時大樹寺に巻巻上人加勢はとき巻巻の旗なり 四軍に勝

りて山内重朝より御馬市より成る事云

家康より初三河國大樹寺に旗を借らせし軍より其勝

終り天下を治給へし家康に旗を借らせしは件の旗

殺向の時を致れ白旗より今頃くの馬旗は
秀忠之進出地東以後

秀忠之白旗は復た成すこと斗りにゆ致村白旗は成

俊れ乳なり
武彦
雅儀

慶長六年九月十日に夜馬路に福富なる大吏三別祖父江注
赤し中若と使者として中へは運徒方の面今夜中
大垣に城中より門掛牧田海島に経る間ヶ原表へ出舞
仕向相早天より一戦を始り切落し中へ行く者も座り間

早く馬路をよせこれをもよほり注新儀を以て方より中存の
者内別中前へ至るに道分也るに成る出り名も成りて女作遣
湯湯清なる石と中へ度とをち振りもしく天正年中長久寺
表よりいづく羽柴秀次との一戦の役と中納戸元宗小姓
成り雅儀が担秀次方れ大軍が成りつと進路しとて終
らぬかつと中へ成り成りし馬路より成る名も中納戸衆
中甲はと成り上り中へ成りてその終りて茶ちりめんの
ほう紙く紙巾をなすせられり南てはくゆ出る

松平の事

落穂集

一 箕川陣

家康公の旗本に脇の白布袴の茶色の羽織をとりて

小笠原の侍三十八人本多百助の弓組一佐ふり守りする

元和
軍紀

一 権現様大坂の装束に似て笠の石茶の羽織浅黄の袴

袴はちりへ甲の甲申立のたれ

寛元
圖書

一 権現様御一代の御自守の御切の茶袴の白布袴

負は長條の腰物にのりガはさ中はいかたへ

多成は是の長條の敵方より所馬の御下取りの加友

毒丸の天野三郎兵衛切のきき志月が居つて御刀

くわの口四角のしきりかたのり大坂落穂の翌年七十

又には所他界から夫の御服をとりて大坂の陣

引六月の御衣の御袴の御下取りの御下取りの御下取り

候後をわりの御袴の御下取りの御下取りの御下取り

古士
落穂

一 大坂陣より京二條より

家康公の出三條寺町より伏見へ中出南都地方へ清越
かりゆきお捨り紫の編緬のは羽織も考樂あり尾張振
はる上には銀の焼く銀は具足紀伊極々尾三焼く同
く黒具足とありは焼の天返り出考尾のたて物あり

先將
彦彦

一 大坂陣のとき

家康公は米持せし道々へに石川を渡り美濃公

九毛之節を湯より故實共高彦く庭れきり外とさき
持して居上たりよりなり種信かとも一代のる米持
持しは書竹を二人斗り切角より紙と舟帯の敷を

扱ひゆされし景勝元の出

武事
紀録

一 大坂陣十月十日出馬り付於駿府市近郊外松り

五の浦へ密に此陣の用意あり兼て考藤に出立
て有しお作出りとも各石方へ交交仕ひゆ申く艶かり
ましても駿府宗馬鮮買佃ひり不自由かりその時分駿府馬

喰只支へりて馬惣令難儀あり別十日頃の時分迄
分候る其別限く存てお出ひれ名通く確有也觸何も白
存く羽織若の中に風流ふん装束お立あつて勇進て卯
の刻より令出ると侍りたり水井右近を安返帯刀か
之高の羽織本の上野分帯は之指出立ひ下り

家康梅清装束云々許も存ひ由小く奥方入おあちや
く進交りて帯ひぬくおあちやも此侍の由聞ひ何程
の不利ひかかり知くお出立ハつてその時分中ひ

早曉れお尋ねれお装束おあちや股引お羽織お子鞋て出
立の由上意小くお支交も云々て帯ひ上馳候ハ候
羽織お碧黒羽織若く各ハ着ひるお若くお中ひ小付右の
支度より有へ已刻

お家康梅中表へ出沖島へお立出候てお城様御方へお
上野分を名金の瓢箪へ令の昇連の由小馬中斗お持せ
てお出立候へりてお立今晩田中てお出立候へりて
お侍行列仕押出紀保及書給りてお押安返帯刀てお出立

河野野の依ハ其用のよ〜其作也

家康極ハ持船ハ中ノ〜也其船多成田中ハ其下其成リ

其作也ハ上後府内進發ナリ上方面も右折通市乃ハ其下

中其立リセ也其の志ハ其下

家康極ハ服乃ハ其船中ノ〜也其船多成田中ハ其下其成リ

村越乃

伴光書

冬也陣ノ十一月十日

家康公原刻ノ二條河津陣ハ其船多成田中ハ其下其成リ

其下

其下

教令に〜依キ其船中ノ〜也其船多成田中ハ其下其成リ

其係沢合右馬ノ其田中其船多成田中ハ其下其成リ

其ハ大久保其船中ノ〜也其船多成田中ハ其下其成リ

将埒内其船中ノ〜也其船多成田中ハ其下其成リ

布施孫其船中ノ〜也其船多成田中ハ其下其成リ

其下其船中

其下其船中

其助等其船中ノ〜也其船多成田中ハ其下其成リ

其ハ其國の〜也其船多成田中ハ其下其成リ

其宛其船中ノ〜也其船多成田中ハ其下其成リ

公ね共しく此門の心番を成務りるゝ教く入られ之同公事件
の事不々為る迄宿所多ゆりゆりてにそ教謀申し出
火有く諸少かそとてお消り終り又希當番申すも為不
小弁

家康公其悔意を成務り終り領部二子六百石の内は是夜に
十人と云石上逼塞して居たりて一歳程かくり候間公
若れとて一兵付を尾と聞らぬ候事と云ふりりも水取平右
邊の渡邊忠在等二人共力同公共く尾張宰相義直の腹に

中將新宣等より付給りて依り此列に加り候番并
の字は若れはこれ駕の近前にお居り候事と云ふ候間
何野重右衛門洲川重右衛門佐久右衛門内子山城宮内少輔
本新重右衛門清水権助終末右衛門間重権右衛門初藤野信忠
是の諸証右衛門等より米倉公序在等ハ此れ字の指物に下り米
倉丹波等々書りし旗と指物田隠波等々幸考地共け旗ハ八
幡と書たり子息内藤圓市使ありて休ませ候城和泉等ハ
小使々々和年武義等陣の扈從す小栗又市物取あり

りれども武功有とのせられたるに侍あり初より今も於
末津中湯漬多石に候し素良(清)出馬あり申下(下)刻(刻)素良
小(小)兵(兵)中(中)坊(坊)左(左)近(近)宅(宅)下(下)止(止)宿(宿)あり
今(今)本(本)本(本)大(大)
坂(坂)軍(軍)記(記)

一 復陣八月六日辰の刻

家康公京都中を發あり侍せしる皆具足成程す惣
白の巾着七本ふせりおし之巾着中(中)右(右)田(田)小(小)左(左)衛(衛)門(門)朝(朝)倉(倉)友
十郎其跡より重(重)井(井)扇(扇)子(子)大(大)る(る)中(中)銀(銀)の(の)瓢(瓢)箆(箆)指(指)通(通)し(し)中(中)に(に)金(金)は
切(切)割(割)付(付)た(た)る(る)小(小)馬(馬)中(中)カ(カ)ひ(ひ)く(く)白(白)布(布)く(く)厭(厭)離(離)穢(穢)土(土)欣(欣)求(求)淨(淨)土(土)

としの經文とこの國の大樹寺和尚堂(堂)譽(譽)上人(人)の書(書)たりし
吉(吉)例(例)の(の)巾(巾)着(着)二(二)箱(箱)く(く)入(入)る(る)巾(巾)駕(駕)れ(れ)服(服)し(し)右(右)前(前)擔(擔)し(し)り(り)中(中)侍(侍)者(者)
右(右)に(に)は(は)小(小)金(金)は(は)く(く)小(小)字(字)と(と)書(書)た(た)る(る)指(指)物(物)あり侍(侍)者(者)の(の)扨(扨)位(位)
中(中)の(の)巾(巾)着(着)小(小)姓(姓)元(元)白(白)く(く)紫(紫)の(の)母(母)衣(衣)と(と)か(か)け(け)根(根)の(の)切(切)割(割)の(の)出(出)
半(半)月(月)け(け)前(前)立(立)との(の)お(お)も(も)い(い)れ(れ)後(後)金(金)紋(紋)付(付)し(し)る(る)梨(梨)子(子)地(地)錦(錦)籠(籠)厚(厚)
房(房)の(の)鞆(鞆)も(も)て(て)右(右)刀(刀)刀(刀)に(に)い(い)る(る)あ(あ)く(く)皆(皆)照(照)輝(輝)し(し)る(る)は(は)ゆ(ゆ)
姿(姿)見(見)物(物)は(は)く(く)持(持)た(た)り(り)ぬ(ぬ)
今(今)本(本)本(本)大(大)
坂(坂)軍(軍)記(記)

一 復陣大馬下重井扇巾着より先(先)行(行)小(小)出(出)る(る)中(中)銀(銀)の(の)巾(巾)

月

將軍山懐のよきけ馬市も

秀忠極へし附屬多抱ひ

村哉乃
伴見書

一 侍者番元みけ字の指物みけみけの事はくみけ人乃

中使有る故に中智一はた方格もていそい小栗又市

みけ字の指物と格走廻り我甲列方より具いそ

神君れ中陣へ向く騎馬二騎出みの字れ指物の働毎友

無活類の言を考へて即そ以後又市く侍使あけ面い

つしともみけ字よりてあぬひるより方指物上いし上意にけ夫

より中使番いつしと五の字なりぬ其身いみの字は上い由

て天板侍陣の時中使番を勤しとも白地と黒い備の指物

戎指一外共は人の中使あはみの字れ指物なり小栗も物

語
茶橋齋
花開書

一 神君侍馬市金の扇子なり此ら牧野半右衛門金れ扇子と

指物に仕ふるまをさすれり侍る中に多抱するなり

然とも茶方より格あへたる間半右衛門と如茶金れ扇子

の指物とそ仕音令せしと小田原中陣はるゝハ牧牛有馬の指
物ハ扇子かゝりし使物とそ字ハ指物と令せしれり不是と
本小栗又市ハ指物あり是と石とれりし使武者共
み人の思石かゝりし使物とそ字ハ其思石とせり

希橋篇

菟園書

